

研究大学における新入生への学習支援

ーメルボルン大学の事例よりー

メルボルン大学高等教育研究センター上級講師
ケリー・リー・クラウズ

研究大学において新入生が大学での学習にスムーズに移行するためには、大学側から彼らにさまざまな学習支援を行う必要があります。メルボルン大学では、学生生活の知的、情緒的、社会的側面など、幅広い領域にわたって多様な学生ニーズを把握しています。

「知的な移行期」(intellectual transition)にある新入生に対して、メルボルン大学では学部ごとに総合的なサポートを提供しています。学部長はオリエンテーションで学生を歓迎し、新入生がこれから学ぶ専門



分野について紹介します。そして、その分野の特徴や主要な研究活動について説明を行います。場合によっては、すぐれた教員や成功をおさめた卒業生を新入生に紹介することもあります。こうした試みは新入生が「学びのアイデンティティ」(academic identity)を形成する上で重要な意味を持っています。研究大学の学生は将来研究職に就き、学問の発展に貢献する可能性を秘めているからです。上記のような試みは、研究を重視し、すべての学生に高い期待を寄せる研究大学の学習コミュニティに新入生の帰属意識を高めることにもつながるのです。

新入生をそれぞれの目指す学科・専門分野へと方向づけていく上で、教員は重要な役割を担っています。教員は研究分野に関する情報を相互に共有しており、その学科で何が学べるのか、何が得られるのかについて学生に教えることができるからです。メルボルン大学のある学部では、新入生が自分の専門分野の学習方法について詳しく学べるように、ランタイムセミナーを開催しています。ここでは教員や学習アドバイザー、



および成功体験をもっている先輩学生の話聞くことができます。

メルボルン大学の新生プログラムでは、「新入生担当教員のためのガイド」(A Guide for Teachers of First Year Students)を提供しています。これは新入生の教育に携わる教員にとって役立つ内容となっています。新入生が可能な限り多くの学習経験をできるように、まずは教員に対するサポートが行われているのです。メルボルン大学が特に力を入れているのは、自律的な思考・学習および問題解決を促すような学習方法を学生に修得させるために、新入生を担当する教員の教育スキルを高めることです。具体的には、主体的学習(active learning)、教室でのグループ・ディスカッション、および授業時間外にグループで協同し

て取り組む課題設定などのノウハウです。メルボルン大学では、学生が主体的に学習活動に取り組むこと(教室で、オンライン上で、授業時間外で)を最善の学習方法であると考えます。多くの学生にとって、こうした学習活動は初めての、そして意欲をかき立てられる経験でもあります。彼らはこの経験を通して自分の学習スキルや学習方略を身につけていくのです。

学習活動に加えてもう一つの重要な点は、大学新入生が体験する社会的・情緒的な側面です。高校を卒業して大学に入学すると、学生は新しい友だちをつくり、仲間同士の人脈をつくるという重要な問題に直面します。メルボルン大学のすべての学部では、学生相互の親交を深めることに多くの時間を費やしています。このことは、新入生が大学に対する帰属意識を高め、大学が「学びの共同体」であることを知ってもらうために必要なのです。

ある学部では、学生同士でメールアドレスや携帯番号の交換を奨励するbuddy(仲間)というピアサポート制度を設けています。こういった交流に加えて、学生同士が教室外で集まり、一つの課題を達成し、同時に人脈を広げていくことができるよう、共同で取り組む課題が与えられます。

このようにメルボルン大学では、明確な教育目標をもったさまざまな活動に新入生が主体的に参加するよう促しています。同時に、大学が「学びの共同体」であるという意識を高めるために、新入生が大学での人間関係を築くことを支援しています。

News!

『名古屋大学新入生のための スタディティップス』を刊行

名古屋大学高等教育研究センターでは、このたび『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』シリーズを刊行いたしました。このシリーズは名大の新入生が大学で学ぶことの意味を理解し、大学での学習活動を充実できるようにするためのアイデアや実践方法をまとめたものです。新入生向けの学習支援教材として、4月の新入生ガイダンスで新入生全員に配布しました。

今回は、第1号「学識ある市民をめざして」と第2号「自発的に学ぼう」の2冊をリリースしました。第1号では



大学で学ぶことはどういうことか、研究大学とは何か、大学時代に何をなすべきか、大学で学ぶ際に守らなければならないルールについて、わかりやすく説明しました。第2号では、名古屋大学の新入生が自発的な学習をできるようにするための具体的な方法論をわかりやすく示しました。先輩学生や教員からのアドバイス、コラム、イラスト、内容の要点をまとめたチェックリストなど、新入生が親しみやすい内容になっています。

大学での学習活動にうまく適応できるかどうかは、高校までの受け身の学習スタイルから脱皮して、主

体的・自律的・自発的な学習者になれるかどうかにかかっています。さまざまな研究結果によると、特に入学後の半年間が重要な意味を持つと言われています。名大生は基礎学力の点では比較的恵まれているといえますし、それが「学ぶことを楽しむ」学習者になりきれない学生は少なくありません。本シリーズが主体的に学ぶためのきっかけを提供できれば幸いです。

名古屋大学の学生・教職員には本冊子を無料で差し上げます。ご希望の方は、高等教育研究センターまでご連絡下さい。

(事務室内線 59006 info@cshe.nagoya-u.ac.jp)。(近田 政博)

大学における学生の就職支援を考える

大学生の就職やその支援をめぐる問題は、どの大学にとっても重要な関心事になっている。いうまでもなく大学は専門的な知識や技能を学ぶ場であり、それを保障する教育が重要な位置を占めている。それと比べれば就職は卒業後の生活にかかわる事象であり、その支援は大学の本来の使命とは言い難い。にもかかわらず、そのように言い切ることは難しい状況にある。

その背景には、この問題が各大学の経営に少なからず影響を与えているという事情がある。卒業後どのような企業や官公庁に何人の学生が就職したかは、受験生やその父母、高校の教員によつて厳しくチェックされる。進学先の大学を選択する

際に、こうした実績が大きく左右する。学生の授業料や受験料収入に大きく依存する私学にとどまらず、国立大学でも事情は大差ない。この実績が順調であれば、数多くの学生を集めることができるし、優秀な学生を集めることも容易になる。さらに彼らの卒業時の就職活動を容易にし、大学全体としての就職実績も高められる。マスコミがとりあげる大学ランキングでは、各大学の就職実績やその背景にある就職支援の活動がしばしば評価指標に加えられている。

文科省・厚労省の学生等の就職状況調査によると、2005年4月現在の就職率は大学全体で93.5%（国立94.0%、私立93.4%）

であり、超氷河期といわれた状況を脱しつつある。しかしここには、途中で就職を断念した者、明確な進路計画をもてない者などは含まれていない。大学院等進学も就職しない学生も少なくない。

こうした事態を受けて、各大学とも学生の就職促進のために多様な取組をしている。主な取組内容をみると、就職活動ガイダンス、就職部門への学生の登録、適性・性格テストの実施、個別の進路指導、履歴書作成の指導、エントリーシート作成の指導、筆記試験の指導、面接の指導、求人資料公開・提示、学内における個別企業説明会、学内就職フェア等である。実に多種多様であるが、これらの中には1年次から

開始されているものもある。まさに手取り足取りの観がある。これまでは取組の中心は私大であったが、最近では国立大学でも取組が広がっている。その背景には、いうまでもなく就職難という状況があるが、それだけではなく、法人化に伴い他の国立大や私大との競争がある程度意識されていることや、学生の就職実績なども評価項目の一つとして重視されていることなどが影響しているように思われる。とは言え、私立と異なり国立は就職支援のために活用できるリソースが限られている。就職支援の専門部署はもちろん専任職員さえも配置することは難しい。就職支援で一定の実績のある一部の理系学部を除けば、教員がその活動を担うことは一般的ではない。そのため、就職活動を終えた上級生に協力を求める方策がとられている。事実、名古屋大学でも熱心な先輩学生が後輩のために積極的に支援している。

しかし、より多くの学生を対象により系統的に支援を行うためには、正課あるいは正課外の教育活動を通じた支援が必要であろう。それは一口に言えばキャリア教育ということになる。社会に対する深く鋭い洞察力と広い視野を持ち、変化の激しい現代社会の職業生活にも適応でき、その中で能力や資質を磨くことのできる、その意味で幅広い職業能力を身につけた学生を育てることがますます求められている。実はそれは本来の高等教育の目的ではないだろうか。ことさらにキャリア教育と言わなくても、高等教育を充実させれば達成できる目標である。その意味で、まずは高等教育の充実に務めることが、まず求められているように思われる。

（夏目 達也）

Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

カリキュラム (Curriculum)

日本語で「教育課程」とも訳されるカリキュラム (curriculum) は、「自分の歩む進路、走路、流れ」を意味するラテン語のクレレ (currere) を語源にもつといわれています。カリキュラムは、ある教育機関の教育理念や目標を具体的な教育活動の全体計画として表したものであるといえます。学習の主体である学生にとっては、何がどの時期に学習できるのかを知るための枠組みであり、入学から卒業までの学習行動の指針になります。その指針は、単に時間割といった狭い意味に限定されません。個々のプログラムやコース、授業の枠組みを示すとともに、多次元にわたる学習内容と達成基準を含んだ空間的、時間的な広がりを持った地図のようなものです。

名古屋大学は学士課程の「四年一貫教育」体制を謳っています。その実現には、基礎教育および教養教育を担う全学教育の科目と専門教育を担う学部の科目のすべてが、教育目標の達成にむけて、学習者の視点から体系的にみえるように設計され、その設計思想が全教職員に共有されることが必要になります。そのためには、名古屋大学の教育にかかわる人たちが、まずはカリキュラムに関わる用語やシステムについて知っておくことが第一歩となるでしょう。このコラムでは、そうした関連用語やシステムを「カリキュラム・グlossary」としてご紹介し、名古屋大学におけるカリキュラムをめぐる対話の促進に役立ちたいと考えています。（鳥居 朋子）



読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

歳のせいでしょうか。学生の行動に首をかしげることが多くなったような気がします。たとえば、廊下で学生たちが立ち話をしています。彼らは、自分たちが廊下をふさいで、人の流れが滞っているのにまったく気がつかない様子です。あるいは、授業中に睡魔との戦いに敗れてしまうのではないに、最前列で「さあ寝ろぞ」とばかりに、はじめてから突っ伏している学生も確実に増えてきました。

こうした現代の若者の「わけのわからなさ」は私たちにいらだたせます。ここで、彼らに対する軽蔑や憎悪の念を募

『他人を見下す若者たち』

速水 敏彦 著

講談社現代新書 2006年

らせても何も解決しません。しかし一方で、古代ギリシアの昔から「いまの若い者はなつとらん」という言説はあったようだ、と物わりの良い顔をしてやりすごしてしまうのも、どうかと思います。なるほど世代間の諍いという事態は、歴史を超えたものかもしれません。しかし、若者の「問題行動」とされるものの中身は、時代の症候とでも言うべきものをそれぞれ反映しているはずで、学生が大学教育の目的を全うできるよう、その症候を分析し理性的に対応を考えることが、私たちの務めではないでしょうか。

速水敏彦教授（名古屋大学大学院 教育発達科学研究科）の手になる本書は、傍若無人に映る若者の行動の背後にある心性を「仮想的有能感」と名づけています。これは、他の論者によって「根拠のない楽天主義」とか「消極的自己高揚」とも呼ばれてきました。筆者は、この仮想的有能感の構造とメカニズムを、ご自身の心理学的研究の成果を援用しながら解き明かしていきます。仮想的有能感の持ち主において、自尊感情の低さと他者軽視がどのようにして共存することになるのかが解明され、個人的出来事ではキレイすいのに社会的出来事には無反応であるとか、お涙ちょうだいの映画や小説に惹かれるといった、若者たちの心性が構造的に解き明かされていきます。本書は、若者の「問題行動」についての理性的検討を開始するための好個の一冊です。ぜひ一読をおすすめします。（戸田山 和久）

高等教育研究センタースタッフ (2006年4月現在)

センター長 戸田山 和久
専門領域：科学技術社会論
教授 夏目 達也
専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
助教授 近田 政博
専門領域：比較高等教育学、初年次教育
助教授 中井 俊樹
専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント

専任講師 鳥居 朋子
専門領域：高等教育カリキュラム論、教育経営学
助手 齋藤 芳子
専門領域：科学技術教育、科学技術社会論
専任職員 井上 和美
事務室連絡先：052-789-5696

<平成18年度 外国人客員教授>
クリスティン・ハルス (2006年4月～2006年9月)
ウエスタン・シドニー大学准教授 (オーストラリア)
ジェラルド・フライ (2006年10月～2007年3月)
ミネソタ大学教育人間発達学部 (アメリカ合衆国)

<平成18年度 国内客員教授>
小笠原 正明 東京農工大学 大学教育センター 教授
馬越 徹 桜美林大学 大学教育研究所 所長
吉田 文 独立行政法人メディア教育開発センター 研究開発部 教授
ホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>